ホネームーン……御羨ましい事ね

わたしの日頃憧がれてた所ばかりですもの……伊香保なんて、本當に詩的だわ、浪さんの蕨狩りを思ひ出したわ。

私これから少し御料理の御手傳ひでもしますわ、やがて人妻になつてから失敗のないやうに……

今は夕暮……オレンヂに西の空の美しう彩らるゝ頃、何していらつしやるのでせう

青葉の窓にハズ樣と二部合唱でもしていらつしやるのでせう……それとも……美しい銀座の夜の散歩に御出掛けでせう。

また御珍らしい都の樣聞かして頂戴……

あなたの御やさしいハズ君……わたしのまだ見ぬ御なつかしい御兄樣、（御めん遊せ）

へよろしくおつしやつて下さいましな、とこしなへに御二人の幸を祈りますわ。

姉を迎へて

T樣

長い事御無沙汰しておりますわ。如何していらして・わたし・T樣にうれしい事お知らせしやうと思つてこの間から樂しみにしてましたの、どんな事つて、……あてゝ御覽なさい、……御姉樣が出來たのよ、誰のつて……私のよ　この月の始めに御國から兄さんにお嫁さんがまゐりましたの　どんな御姉樣と思つて……束髪の時は七三の分前髪、今日はみづみづしい丸髷に翡翠の玉、……成園さんにも御願ひしたいやうな美しいお姉樣よ……御婚禮の夜……遲く自動車でゐらした皆さんを玄關に出迎へた　私は藤紫の地色にコスモスの花を散らした、振袖姿美しい花のやうなお姉樣の姿にうつとり見とれましたわ。可愛いがつて頂戴つておつしやつた時は　泪が出たわ、嬉しくつて嬉しくて、それから毎日何と言つて御姐樣に御話しやうかと苦心しましたわ、だけど直ぐに仲よしになりましたの御料理してゐらつしやる御臺所にいつては、いつも珍らしい御料理を習ひますの。

白いエプロンかけて、美しい手で、やさしう教しへて下さいますの、毎日毎日近頃の食膳には珍らしい西洋料理などが並べられて、父も母も大よろこびよ・御兄樣つたら會社から歸つてもニコニコしていらつしやるんですもの、此間ね、兄さんが私に

「姐さんはごうだい」おつしやるのよ、だから私ね、「御姉さん好きだわ・だけど兄さんはきらいだわ、」云つたら笑つてましたの、御手がすくと御姉さんの御部屋へいつて・色々の御寫眞をみして戴きますの・御姉の御小さい時 御人形さんのやうに可愛いゝのよ・御姉樣は 音樂學校御出身よ・・・・・そりや御聲がいゝのよ、ソプラので獨唱なさる時はふるいつきたい程い わ・わたしピアノ敎へて頂だいてますの・・・・・・

此間は御姉さんと御二人、松坂屋へ行きました、誰も彼もが御姉樣の姿をふりかへつて見ますので 私までが嬉しかつたわ

歸りにわたしには・華美な伊達卷買つて下さいましたの、嬉しかつたわ・歸りには何度も何度も有難う、有難う云ひましたのよ。

一度皇樣・御遊びにいらつしやいな、氣兼なんかちつともありませんのよ、そりや若い人の心を理解して下さいますのよ、色々の御話して指導して下さいますわ、わたし御姉樣がいらしてから本當に幸福ですわ、御やさしい御姉樣を迎へたのが何より嬉しいと思ひます、いつまでもいつまでも御家にゐたいと思ひます。

故郷より

（都の妙様に）

妙様

青白い新月が夢のやうに照しております・じいじいと秋の蟲がむせび鳴いて身も心も地の底に引き入れられるやうな淋しさを感じます

こうした淋しい夜頃を妙さんにはどのやうな感慨にふけていらつしやりませう。

今し方までお隣の千代子さんのかなでる十三絃の音がゆるやに聞こえておりました・

あはじ島通ふ千鳥のなく聲に
幾夜ねざめぬ須磨の關守。

あの頃　毎妙様と合奏した好きな千鳥の曲・過ぎたあの頃がなつかしく御座いますわ・去つた昔が戀しく御座います。

妙様と悲しい最後の御別れ致しましたのは、昨年の今頃で御座いましたのね。

月の美しい秋の一夜・妙様の御家の御緣にこしかけて妙様の御口から悲しい御別れの事

を聞きました時は、わたし胸はどのやうな悲しみに打ふるへましたでせう　やさしい姉も妹もない獨りぼつちの身には孤獨と云ふのは堪えきれぬ程悲しい事ですの・その夜きりたつた御一人の御姉様とも慕つた妙様にも御別れしてほんとうの天にも地にもたつた一人きりになりましたもの。

コスモスの花が垣根に匂ふ頃・…　妙さんの華やかな御婚禮がありました、一生に一度の華やかなるべき・妙様にとつて榮ある日はわたしにはどのやうに悲しいのろはしい日で御座いましたでせう、御ゆるし下さいましね・薄ら灯りのともるゝ頃　母がわたし室へかけ込んで。

今妙様の御婚禮が通るよ」

と知らして呉れました・華やかな喜びに充ちたあなたの花嫁姿によそ乍ら御別れしやうと御二階の障子をあけてうす暮い往來の方へ目を移してゐる時・何臺か續いた車の中に・ほろにかくれたあなたの御車をぼんやり見ましたやがて車は夕暗の中にすつかり失せて見

えなくなつた頃ビシャリと障子をしめて机の上にうつふして、思ひきり泣きましたわ、

往來では人々が。

「美しい花嫁さん」

と口々にほめそやしてゐるのも現のやうに聞きました。

わたしのたつた一人の御姉様はもうわたしの手から奪はれたんですもの、もう永久にと思ふと新らしい泪が跡から跡からととめごもなく……苦しく御座いました。

あの夜きり一度も御目もじ出來ないで妙様は御良人と都へ御出發なさいましたもの……

……私は相變らず御針へ通つておりますの、あの水車のほとりの土橋を渡つて……

妙様と御二人いつも通ひ慣れたなつかしい道でしたのね　露のしとゞにおいた朝の道を御對の着物に赤い帶をしめ紫の御包もつて……いつも讃美歌を唄つたり　面白い御話をしたりして、いつでしたつけね、そうそう……露の朝でしたわね、いつものやうにあの土橋の上を笑ひくづれながら御話に無中になつてた時、向うから肥桶荷なつた村の百性に

あやふくつき當りそうになつて、あはてゝ。

「あゝ臭い」

云つたはずみに紫の御包下の小川の中へ落して了ひましたのねオホ……

今思ひ出してもおかしくなりますわ。

あの土橋もなつかしい思ひ出の小川も……たえずコトンコトンと水車の響もあの頃に何の變りもありませんに變つたのは妙様と私ばかりですわね

御良人の御やさしい御手にはぐまれていらつしやる妙様をしみじみ幸福と思ひます、

いつまでも幸多く御過し遊ばしませ。

若き身を病みて

なつかしいT子さま　（南湖院より）

悲しい醫師の宣告を受けて淋しい南湖院に病を養ふてから早一年と云ふものは、夢のやうに去つて了ひました。

愈々、なつかしい都を離れると云ふ日……しとしとと春雨の煙ぶる中を、子樣や親しい御友達が二三人、驛まで送つて下さいましたのね。

最後の汽笛を名殘りに汽車は容赦もなく動き出した

「A樣……早く快くなつていらしやいよ」

「有難う、御きんよう」

お別れの言葉に泪ぐまれて、悲しう御座いましたわ……人目も恥じず汽車の窓にもたれて心行くまで泣きました。

泪にぬれた目で遠くプラットホームをふりかへた時、名殘りを惜しんで下すつた白いハ

ンカチがかすかに次第次第に見えなくなりました。

あれからもうすぐに一年にもなりますものね。

春雨の頃でしたのに……若葉も散つて淋しい秋の夜頃を、萩の夕露のかげにこほろぎのむせび鳴く頃になりましたもの……

淋しい濱べの住まひ、病を養ふ若い人々と幸薄い身をかこち合つては泪しておりますの、うす紅いコスモスの花の垣根に匂ふ朝は、なつかしい水色の校舍に……思ひ思ひの希望を抱いて通學していらつしやる皆樣の事を思ふとたまらなく都の空の戀しうなります。

ベルが鳴つて教室から青空高いグランウドに、放たれた小鳥の樣に飛び出して、ラケットもつて、テニスコーへの方へ走つて行つたあの頃、センティメンタリストのy樣を中に芝生の上にサークル作つて。

「それから…………其人、どうなつたの、yさん」

Mさんが續きのお話をせがんだ樂しかつたお午の休み……今は皆悲しい夢になりまし

たわ　もう後一年で卒業と云ふ間ぎわになつて、悲しい病に巣つくはれて……どうしてわたしばかりはこんなに幸薄いのかしらんとこの身をのろはずにはゐられません。明るい希望も、華やかな空想も　何も彼も暗に葬られて……私の前途も目茶目茶に破懐されましたもの。幾拾年の生涯はすべて空虛で御座いますわ。この先幾年、はかない生に執着を抱いて、悲しい日を過さなければならいのでせう。

何も彼ちも運命だと斷めてはおりますものゝともすれば不覺の泪にくれます。

いつかのT さんの御手紙に、

「氣の持ちやう一つでどんなにでもなれますわ　青葉が匂ふ頃にはきつと快くなつて、又御一所に樂しい學び舍へ通ひませう」

云つて下すたけど　もう青葉の匂ひなつかしい情緒深い夏も病床に訪れましたけど……病室のカーテンの透間から美しい人の濱邊をそゞろ走くのが見えます　同じ病に泣いてる人のみですもの、御いとしく思はれます。

青葉があせて、秋の月がすんでもわたしの胸の病はちつとも快くなりませんわ。

このまゝ消え行くのではないかと淋しく思ふ折も御座います。

毎朝、隣室の人と冷たい濱の眞砂地をふんでそゞろ歩きます、打ち上げられた貝などを拾つて淋しく過してゐります。

妙様の死を

わたしの美知子様へ

黒い杭の根に葉雞頭が眞紅に色づいたのをうつとり眺めてゐたその朝、私は「タヘ、キトク」の電報を受取りましたの。

取るもの取りあへずお妙さんの家へかけつけました、お妙さんの家は海岸の高臺の上にありました。

門をくゞつて玄關に立つたら、ほつそりした御母さまの御姿が見えて私を見るなり、

「妙はたつた今……」

後のお言葉はなく泣きくずれてお了ひになりました、ハツト胸をつかれて、しばらくは口も利けませんでした、始めて我にかへつて長いお廊下を通つて座敷へ導いて下さいました、

お妙さんは白いベットの上に靜かに横たはつておりました。

妙さんのお顔は白蠟の樣に蒼ざめて……

球を溶いだやうに闇しかつた眼は靜かに閉じられて……眞白な頸筋はありし日の面影其まゝでした　たゞ妙樣は眠つてゐるとしか思はれませんでした、今にもあのやさしい唇から何かの言の葉が洩れて來るやうな氣がしてなりませんでした。

「お妙さん」と呼んで見ましたけど、返事はありません。

「罌粟散るを憂しとのみ望むべからず、

散ればこそ又咲く夏もあり。」

と言ふ言葉の當欺らぬのがどれ程口惜しう御座いましたでせう。

妙さんはもうこの世の人ではありませんでしたもの……

お妙さんが學校をおよしなすつて、青山のA病院に御入院なすつたのは銀座の柳の並木が芽ぐむ頃でしたわね、……

本當にあの頃は病人と思へない程、妙さん快活でしたのにね。

いつか　A病院にお妙さんを見舞つた時……病院の庭の紅葉の木の影に、青い表紙の本を讀んでいらつしやつたお妙さんの姿を、病室の白いカーテンの蔭から見て、あんなにおよろしいのかしらんと、我知らずほゝ笑ました。

妙さん間もなく病室へ歸つてまゐりました、深い憂ひを胸に秘めたかのやうに青白い面をして。

「妙さん、あなた今日は氣分がいゝの。本なんか讀んで……」

「エヽ、だつて淋しいんですもの、あなたが來て下すつて今日はどんなに嬉しいでせう……」

つてお妙さんは眉の間の皺を消して兄えるか見えない位の靨を頰に作つて、淋しく笑つてました

お妙さんは病室の片隅に美しく咲いてたチユーリツプの赤い花を指さして。

「美しいでせう、今朝、K兄樣が持つて來て下すつたの

と淋しく心持ち頰を紅くして笑みました

「まあ、きれいな花、丁度妙樣のやうねホ……早く快くなつてK兄樣にも御安心おさせなさいましね

と申し上げて置きましたわ。

K兄樣は妙さんの最愛の許婚の人でしたのにね。

わたしが病院から歸る時……ごんなにお止めしても送つて行かして頂戴……つて雨のしとしとと降る中を　細い身體を蛇の目の包んで……靜かに語り合ひ乍らA町の停留所でお別れ致しました

除々妙さんは哀調のこもつた讃美歌なごを歌つていらつしやいましたわ。悲しい妙さんの歌聲にはかない妙さんの身思ふて泪がにじみ出ましたわ……

妙樣はいつもこんな事云つてましたわ。

『わたし、こうして病んでも決して不幸だとは思つていません、死をのろつた事もあり

ません．わたしもうこれで滿足ですもの．』つて……

けれど　それは餘りにK兄樣にとつておいたわしい事ですわ、おやさしいK樣のお顏の日々曇の勝ちになるのをおいたわしく思ひました　きつと何をか余感していらしたんですわ、妙樣の死をごのやうにお歎ゆ遊ばしていらしいませう……

『もう電車がまゐりましたわ　これでお別れしますわ……又今度お會ひする時はすつかり快くなつてますわ

私が電車に乘つた時　○さんはふりかへつて淋しく笑ひました……

あ．．あの透き徹るやうに青白かつたあの日の○さんの笑顏は……本當に最後でしたわ．今度お目る掛る時はきつと快くなりますと誓つた○さんは再び會ふ日は　もう．この世の人ではありませんでしたもの……

冷たい青白い○さんの死顏に見入り乍ら強い悲しみが胸にこみ上げて來て、熱い涙がほろほろと流れるのをどうする事も出來ませんでした

悲しみに堪えかねて．妙さんのお母樣の涙の繰言もそこそこお暇しましたの、

美知子樣　わたし今度の日曜にお天氣が快かつたら青山の墓地に妙さんのお墓參りをしやうと思つておりますの．いかゞ……妙さんの好きだつた桔梗の花でも手向けませう。

愛する人に　《第一信》

そんなに心配をして下すつて？・でももう大變よくなりましたの、
今朝は又奇麗な花をありがたう・
眞赤なダリヤの花がほんとうに奇麗でしたわ少女の戀の樣な色でした。あの花をね、枕元において・眺めながら寢てゐますの、枕もとの障子に日があたつてゐますの赤い赤い奇麗な日の色よ、
あの日の中に赤いダリアがうつてゐて、まるで血の色見たいですわ
もう一日・寢てゐなくてはいけないのですつて・だから・我慢して寢てゐますの・晩には來て下さいますの、
お目にかゝり度い、お目にかゝり度い、私直ぐにも、あなたのお傍へ行き度い、どうしてこんなに戀しいのでせう、こんなに急にあなたが・戀しくなつて・どうする事も出來ないんですもの

でも仕方がない今日は、ごうしたつて上がれやしないんですもの、戴いた花を眺めて、
今日は一日戀しい戀しいと云つて泣いてゐませう、
ほんとに、晩にいらして下さるのね、きつと……きつと、

第二信

今は午後の三時、兄様
學校はお濟みになりまして……今頃はなつかしい北向きのお室で勉強遊ばしていらしやる事と思います。
あなたの心がいつもわたしの傍は飛んでるやうに、あなたもきつと、私の事を心に描いていらして下さる事と信じます。
今日は何だかつまらない日ですわ。
昨日の樂しさに引かへて……
私は永久にあなたに愛されたい、あなたのお心のすべてを受け度う御座います。
あなたは何かお心に秘めていらしやるんですもの、お願ですわ、何も彼も忘れて下さいましね、罪深い事で御座いますわ。
廣い世界に愛する人……すがる人はたつたつた兄様一人ですもの、わたしは何の欲望

も持ちません。
あなたの愛を受ける事が出來たら、わたし、もうそれで滿足で御座います、
二人に何處まで信じていつまでも愛し合つて行きませう。
お互に理解し合ふ事が出來なければ、二人の仲はきつと破れて了ひますわ。

胸にまことの露がなけりや
戀はすぐしぼむ、花のさだめ、

本當に……さうですわ いつまでも信じ合つて行きませう。

第三信

わたしの愛するK兄様へ

長い間お目にも掛れないで本當に淋しう御座いますわ、それに雪までが降り出しましたどんなにお寒いだろうと兄様の御身がかり氣づかつておりますの、家のものは停車場へ行つて誰れもゐません。まだ學校はお休みなんでせう、一日も早く試驗が終ますやうに、毎日毎日それそれのみ祈つておりますわ。

早くお目に掛り度く御座います。

兄様のお顏に接すると、どのやうな悲しみも苦しみも消え失せて了ひますもの……

お風邪にか らゐ様に勉強して下さいまし、何よりもお身體が大切ですもの、御兄様が生きていらしやる間は私どのやうな事があつても生きておりますわ、あなたの生がつきた日は……わたしの生も亡びますもの

わたし近頃も毎晩おそく迄勉強しております お友達もない身は何より淋しう御座いますわ、お友達としておつきあひする人は誰もいませんもの……けれどわたしはそれを或めやうとも悲しいとも思ひません

わたしにはお兄様がいらつしやいますもの、友情なんて ほんとうに一片の御義理に過ぎませんもの、皆打算的ですわ、

T子様近頃何だかううとましくなりました、人の心は情ないと思ひましたわ、けれども お兄様の愛は清い美しいものだと信じますわ それも相互ひでなくちやいけませんわね、

昨夜おそくまで妹とそのやうな事しみじみ語り合ひましたの、

このやうな殘酷な運命がわたし等にめぐつて來たつて何とも思ひませんわ……自己の決心一つでどのやうな事でも打破して行けると思ひますわ、お兄様だつて私の事でしたらどのやうな事でも實行して下さる事と信じます、義理……なんてそんな虛僞に捕はれて我等の身を一生犧牲にするやうな事はどうしても嫌で御座いますわ、

第四信

淋しい折におやさしいお兄様のたより……身にしみてうれしく思ひましたわ。

毎日毎日降りこめられて　たまなくわびしく御座います。

あのやうな心弱い事を耳に入れるんぢやなかつたんですけれど……わたしの胸の中にしまつておくことは大變に苦しう御座いましたもの。おゆるし下さいまし。

悲しんだ私の心。辛いと思つた心もあのおやさしいお心ですくはれました。

又元の希望に充ちた心に蘇がへる事が出來て嬉しく御座いましたわ。

私の張りさけるやうなせつない想ひ。運命につながれた悲しい境遇。戀と恩愛のヂレンマに立つて身も細る程惱んでおりますけれど……あなただけはきつと理解してゐて下さると信じますわ。兩親の愛も。友の親しみも知らない淋しい身ですもの。

一度野に捨てられてみかへる人もない野性のまゝの名もない花ですわ。

野の花たつて自然のうるほひもありますもの。温い情の露かなければ何時かはきつと枯

れて了ひますわ……わたくしだつて……きつと。

お兄様の温かい露がなかつたら枯れて了ひますわ……情の露のつきる日……そんな事はどのやうな事があつても……きつと信じます。信じますわ。

枯れるならば……いつはりでもいゝ。露のつきつきない間に。愛する人の手に永久に眠つたらそれがわたしにとつては幸福ですわ。

けれど勝利な待ちます。愛の勝利を待つてますわ。運命なんぞに……どんな事があつても……何で倒れませう。

自分等の事は自分等で解決をつけますわ。あなたの期待には決してそむきはいたしません。わたしの胸に不斷の戀の焰がもえてる間は……

第五信

昨夜は大變な雨でした……

今宵は何の音もしない……本當に靜寢な死のやうな沈默を空つてる中に月は中天高くさえております。

御兄樣の御側へ思ひを馳せて、過ぎし日の事をなつかしみ、苦しい中にも樂しい現在、未來の事など思つて淋しう御座いましたわ。

御兄樣、ごうかして御側へ居いて戴き度う御座いますわ、せめて一日でもね、御一所にゐる事が出來ましたらどんなにうれしう御座いませう。

そうなつたら私の日頃の惱みも苦しみも消されて終ひますもの、けれどそれは今は駄目ですもの、心細くなります。

毎日でも御目もじ致し度う御座いますけど、しばらくは何も彼も堪へて行きませう。

たゞ未來の夢にのみ生きて行きますわ。

そうしてその夢の實現される日の一日も早かれかしと祈ります。

夢の實現された日、その日はどのやうな幸ひに輝く事で御座いませう

今日はこうして御手紙の上に淋しいお別れを告げます。

今三時……何を遊ばしていらつしやいませう、御勉強なさいませ、わたしも望み抱いて勉強しておりますから……

第六信

御手紙待ち乍ら夜に入りました。

御病氣じやないかしらんと心を痛めておりますの。

今朝は少し寒むかつたやうですけど、お午から温かになりました。

お家の二階の窓から、ずつと城の越の方の山がきれいに見えますの、いつもこの窓でいろんな想像をしております。

今頃は何をしていらつしやいますかしらん。

御病氣でなければ・御勉強と思ひましたわ、兄様の御姿が目の先にちらちら致します、

御目に掛りましてから一週間になりますのね、早いものですわ、この分で過ぎていつたら一年位直に過ぎて了ひましわ、わたし朝が來ると夜になるのを待ち遠しく思ひます。

早く夏になりて又Aさん方とボート浮べて海へまゐりませう、過ぎ去つた去年の夏を思ひ出してなつかしくなりますわ。

Aさんのお家の破璃窓からはいつも美しく澄んだ海が見えます・金線まばゆい夕陽をバラソルにうけて、あの濱のかへりを……なつかしい追憶にひたり乍ら御手紙をまち暮しておりました。

第七信

わたしを信じて下さいまし。

どのやうな冷笑にも屈辱の前にも倒れは致しません、わたしの尊い肉體も、火のやうな戀の前には何物をも燒つくしてみせます、きつと、きつと……苦しい月日も夢のやうに流れて行きますわ。

過ぎ行く月日を數へるよりはめぐり來る幸ある月日を數へて樂しみませう。

決して決して悲しみません、本當にもう泪なんぞ流しますまい。

けれど……やはり戀は淋しう御座います、悲しうもなりますもの……泪を御とがめ下さいますな……泣けばたゞしばしでも心の和むのが嬉しう御座いますわ……

華やかな香は失せてもしをらしう淋しく咲いた野性のまゝの花を愛して下さいまし……

……とうとう雨になりました、遣る瀬ない……本當にたまらなく淋しう御座いますわ……

……今日もこのまゝ淋しく暮て行くので御座いませう、何の光明も見ずに……

其日其日の暮行くのを樂しみに……若き身のうつろひ行くのも忘れはて、……何と云ふはかをいよろこびで御座いませう。

雨の晴れ間を夢のやうなおぼろ月がのぞいてるさす、魂までも引き入れられるやうな……來年の春は、こうした月を御兄樣と二人で眺められるやう、御空の星にはかない願ひをかけませう。

第八信

御兄様、決して決してわたしを、うらまないで下さいまし。

わたしの心は、どのやうな時でもあなたの御傍にゐますもの……そのやうな悲しい事、おつらしやらないで下さいましね

わたし、どんなに寂しう御座いませう。

こうした悲しい境遇にあつても……希望と、光明とを忘れないで生きて行きませう

淋しい蟲までも鳴いて余計に悲しくなります、御兄様だつて　どんなに御嫌やな事も御座いませうに……御傍にゐて御慰めする事も叶はぬ身を御ゆるし下さいまし。

けれど、どのやうな時も、わたしはあなたのものである事を決して忘れは致しませんわ

あなたの御傍にゐる日が來なくとも……いつまでも、いつまでもあの日の誓ひを忘れないで下さいまし。

何事にも堪えて行きませう。

あなたに御目に掛れないのは私としては何より悲しい事ですけど……。

本當にもう後一年で御座いますものね。

御卒業の榮冠を戴ける日は……どのやうな幸ひがまゐりませう、倒れますまいその日まで。

誘惑に打勝つて

若き人々へ

樂しい希望に充ち充ちた新婚の其日其日を感謝し乍ら・夢のやうに過ごしてゐる身では御座いますけれど　早葉蔭の蔭にそことない初夏の風が吹き、まつ白い卯の花の咲き揃ふ頃になりますとそらおそろしい・或哀愁にとらわれます。

私は樂しい少女時代を温い南國に異國情緒漂ふ、長崎の懐に包まれて若やぎはしやいで過ごしてまゐりました。

櫻吹雪するなつかしいミッションスクールの破璃窓、天も地も若い日の力と輝やきに充ち滿ちた春の運動會、花電燈まぶしい講堂のステージの上に華やかなオペラに胡蝶の精に扮したクリスマスの夜……華やな青春時代をこうした樂しい學校生活に送りました。

美しい花の散つて、春もあはたゞしう過ぎ去つて青葉かしけり・雨が煙り打つゞいた烈日に沖の波がキラキラ光つて樂い活動の夏が訪れました、何處の濱邊も海に遊ぶ人ばかりで海水浴のシーズンになりました。

私等も其頃學友のKさんと千本松原の海水浴場へ毎日のやうに水泳に出掛けておりました、其日も午後から出掛けました、空は紺青に・海もみどりに、Kとわたしは泳げもしないのに浮をか、へて遠く遠く濱を離れて泳ぎ戯れました・其内に岸は段々遠くに見え出したので驚いてKさんと二人・引き返さうとあせりましたけど思ふ樣に進みません。

kも私も一種の不安にとらはれて顔色も蒼ざめておりました、けれど尚も必死になつてあせつておりました時に直傍にボートが見えました、kも私もそつとそのボートに目を移したら男ばかりと思つたのに艶しいパラソルが眼につきました、オヤどんな人かしらんとkも私も好奇心にかられてどうかして其女を見届け樣と思つてましたら其時そのパラソルの中から、ふつと其人は顔を出して私等の方をふりむいたので私等の視線と視線とはぱつたりあひました、兩方とも、まああなただつたの……と大きな聲を出して後は大笑ひしました、船の女は學友のTさんでした　早速kも私も其ボートに乗して戴いて無事に岸へかへ

り着く事が出來てほつとしました・今まで氣づかないでゐたボートの中にはTさんの兄さんや御友達の方だつたのです・Tの兄さんは私等に皆の人を紹介して下さいましたの、

kも私も氣まり惡がつて顏を赤くして了ひました、最後に紹介して戴いたのは、Mと云ふ眉目秀麗の青年でした、何故か私の胸はあやしう戰いて小鳩の樣にふるへてゐました何と云ふ賴もしそうな方だろうと美しい瞳をKさんの蔭から幾度仰いだ事でせう、Tさんの御話によりますとこの青年は、K兄さんの御勤めになつてゐる某會社にこの七月・帝都の大學を終へて新しく入社した方だつたんです、其頃下宿がなくてTさんの御家にいらつしやるそうでした　其間もたへずMと云ふ青年は微笑しながら『御二人とも御暇の折は御遊びにいらつしやい、僕、T君の所にゐますから』と云ふやさしい親しみのある◎青年の言葉をkも私も夢のやうに聞きました、

其日もやがて美しい夕榮に彩られて黃昏初めました。Tさんの進めに私も、kもM青年等と一所にボートで港まで歸りました、日に燒た頰を涼しい夕方の海風に吹かれ乍ら雄々し

いオールの響を耳にして、灯ともし近く港へ着きました・樂かつた今日一日の思ひ出を胸に繰かへしてKと私は皆さんに御別れして電車で歸りました。

樂い次の日の再び來よかしと幾度祈りました事でせう・その二三日は何事もなく愉快に過しました。翌々日の夕方Tさんから御手紙が來てそれにはあの日偶然に御會ひして、本當に樂しかつた事や、あれから歸へつてからの御話が、御兄さんとMさんと私とで・あなたやKさんの御うわさで大變賑やかでした・と書いて其終りにあなたの事をMさんは『マドンナ』とニックネームを御つけになりましたのよ・ついでに御住所も御知らしました・あからず……としてあつたのにわけもなく胸が波打ちました。あのM青年が私の事を『マドンナ』などと云つて、それに何の爲めに住所までも御聞きになるのかしらん……もしかしたら……そんな事はない……だけど……それから二三日何んにも手につかないので、そわそわして暮しました。それから一週間もたつた、蒸し暑い或る日の午後、綠の藤椅子にもたれて、默想にふけつてましたら、玄關の方に『郵便』と云ふ聲が聞

えたので急いで行いて見ると、其處には・白い西洋封筒が見なれない字で　上野美知子様か親展とあるのに、誰だらうかと疑しみ乍ら裏をかへして見たら・M生よりとある、まさと……　思つたのに……あの美しい頼もしそうなM青年から……明るい躍るやうな歡喜の世界が目の前に渦をまいて、若い純な私の心はあやしうかき亂れました、わなく手に封切つて見ると可成り達筆で。

『突然失禮をも顧みず御手紙さし上る事を御ゆるし下さい、ボートであなたやMさん事と樂しい濱で一日過ごした事は永久に僕の胸から去りませんでせう　昨夜突然郷里から電報で・母の病氣危篤につき急ぎ歸郷する旨申し來りましたから　今日の急行で郷里へ向け出發致します。暫らくは御目に掛る事もありませんから御暇の折は左記へ御手紙下さい』

と、たゞこれだけの事が記されてあるのみでした・けれど私は憧がれし人からの手紙を今目の前で手にして夢のやうな幸福に醉ひ暮しました、思ひ餘つて幾日かの後にMさんへの

返事を認めました・それには女性の書きがちな『寂しい私はあなと御會ひした濱の一日を忘れないで・御やさしい兄様としていつまでも御慕ひしております、眞實の妹と思召して可愛がつて下さいまし・

寂しき妹より

私のお兄様へ

として　この手紙の受取つて下さる時のM青年の事を思ひ浮べ乍ら、思ひ切つて投函しました、一日も早くあの御手紙がMさんの御手に入つて・やさしい御返事が戴けるやうにと人知れず待ち暮しました。其頃は私の胸にはあきらかにMを慕ふ戀心が芽ばえた事をごうする事も出來なくて苦しみもだへました　戀しいMの手紙は其後一週間を經てわたしの手入りました。その御手紙は悲しい文字でうづまつておりました・

『須磨に養生に行つて母は私が歸つた翌日、とうとう・あへなくなりました・天にも地にもたつた一人の母を失つた私は　なつかしい須磨波のの音も、松風の音もただ悲しく聞

ゆるのみです。僕は今になつて告白します、寂しい僕のの心の空虛を充たして呉れるものは戀しい美知さんの外にない何物にかへてもあなたを愛する』

と燃ゆるやうな熱烈な一句一句をたゞ涙の中に見ました、直ぐにMさんへは眞心からやさしい慰めの言葉書いた御手紙を出しました、それからはたゞ戀する人の歸る日を一日千秋の思ひで待ちました　夏も過ぎて木々に涼しい秋風の訪るゝ頃Mさんが歸つた旨を知らして呉れました。

私は取るものも取りあへず其日の夕方Tさんの訪問に名づけてMさんを訪ひました。

何日ぶりかにMさんのやさしい瞳を迎いだ時、私はたゞ喜びに打ふるへました、おもはゆい灯の下に、寂しい蟲の音を聞き乍ら　秋の夜長を靜かに語り合ひました。

Mは若い希望に燃ゆる瞳を稍曇らして、なつかしい故郷の事や、悲しい母の死から終りには私等二人の事に及びました　Mは幼い頃に父に別れて、母の手一つで成人したけれど、大學までも卒へさして呉れたのは、一人の叔父だつたそうです、わたし等二人の結婚に就

いてもやはりその叔父の了解なしには、成立出來ない事等呉々も申しました、御互に前途は長いから今暫らくそうした問題から離れて戀人同志として過ごして行きませうとのMさんの言葉を信じました、何時かは二人の結婚が成立出來る…それまでは御互に純な戀を續けて行かうと思ひましたけど、それはMさんの最後の言葉によりてすつかり裏ぎられて了ひました。

そうしてMさんは御終ひに何だか自分は不安だからあなたの肉體迄も所有したいと、わたしに向つて不純な行爲を強いやうとします、あくまで信じ切つたMが、こうした不純な行爲を強いやうとは夢にも思ひませんでしたもの、どのやうに悲しゝ御座いましたでせう、今まで築づいた美しい戀に對する理想も空想も破られて、終ひにはMに對する憎しみのみが殘つて、私はそのやうな不純な行爲に同意出來ない事や、私は飽までプラトニックの戀である事を云つて、其後は傷ついた心を抱いて歸つて行きました。

その日から毎日毎日、傷いた心を抱いて悲しみ乍ら苦しみ暮しました　其後Mからは何と

も申してまゐりません、私からも御手紙も差上げないでおりましたら、或日Tさんから以外な事を聞きました、Mは一週間程前に東京の本店に轉勤になつて出發をしたとの事でした。母が死んで鄕里に歸つた事などは、まるで僞で御座いました、Mが鄕里に歸つたのは妻帶の事だつたそうでした、この事を聞いた時に、私はたゞ口惜し泪にむせびました、そうして　の虛僞に對して眞實の戀を捧げた事を悲しう思ひ乍ら、こうした誘惑から逃れたのをこの秋に對して、しみじみ感謝しました。

濱の病舍より

美知子樣

朝風に病室のカーテンがゆらいで、熱に汗ばんだ頰をやわらくなでて呉れます。

先日はきれなお花を有難う、窓ぎわ近く毎朝紅い花が幾つも咲きますの、花の香りが室に充ちて快よい眠りを誘つて呉れます。

今朝は何だか熱も引いた樣で大變氣分がいゝのよ、まつ白いカーテンの透間から廣がり見ゆる濱の眺めは靜かですわ、遠くまで眼つたやうに霞すんで見えます。

沖へ出る船もちらほら見ます、まだ朝の回診も濟みませんのよ、今に白衣の人が朝の食事を運んでまゐりませう。

先日A樣がいらして

『少し痩たのね』

とおつしやつた御言葉に淋しく泪ぐんだ事を思ひ出しました、あなたの樣な御體ならと

云はれた私が……病みつかうとは……よく御家にある頃、

『病氣になり度いわ、そうして靜かな床に横はつて考へる樣な時でも來なけれや、詩想は皆枯れて了ふわ』なんて云つて母樣に

『何を云ふのです、馬鹿な』

とさんざんに叱られた私でしたのに……毎日毎日單調な濱の病院生活には飽き飽きしてまゐりましたわ。

御話する御友達もなく、たゞ折々白衣の人を相手につまらない世間話するのが關の山ですもの……其日其日の病床日誌をつけるのがわたしの御役目ですの、快よいよく晴れた日などは單衣の上に御羽織重ねて病院の裏門から濱の方へ散歩に出掛けますの……餘り涼しい風に吹かれて歸つて熱を出して先生にお叱りを受けた事も御座いますわ。

夜になると濱の松風がさわざわと耳についてちつとも眠れないで、淋しうてなつかしい御家の事思ふと子供のやうにすゝり泣きますのよ、お隣の三號の病室にはお若い女の方が

いらつしやいますの、熱心なクリスチャンでいらつしやいます。

いつもやさしい讃美歌が洩れて來ますわ、白いベットの前に神々しい夕べの祈りを捧げていらつしやる美しいお姿を折々見ます其時は私は云ひ知れぬ感慨に打たれますわ。

夕べになると私は思ふともなしに御祈りの神秘的なシーンを思ひ出して、淋しい乍らも生き生きした喜悅に輝いてゐるTさんの瞳を思ひますわ。

お淋しい時なぞはよくゲーテの詩集などを持つて私の病室へいらつしやいますの、いたましい胸を抱いて、いつかは癒へる日もあるでせうと淋しい斷めを持つて、ほゝ笑んでいらつしやいますの木の葉が紅葉する頃には私の病も癒へてこの淋しい濱の病舍を去る事が出來るやうにと祈つておりますわ。

今日もTさんがトランプ持つていらして、あなたと私とごちらが早く退院するか　運命くらべをしましやうと、白い手でサラサラと札を切つていらしたが急に、

『アラ、わたしキングよ』

とおつしやつて嬉しそうに美しい頸を赤く染ていらつしやるんですもの……本當にお
いとしう思ひましたわ・何卒神様・T様の病を早くお癒し下さいましと心ひそかに祈らず
にはゐられませんでしたわ。
寢るのには早いからと素足に冷たく感ずる御廊下をスリッパ履いて娯樂室のピアノの西
洋更沙の被市とりのけて、キイに手をふれました。
今宵も淡紅色のカーネーションの醉ふやうな芳醇な香りが御部屋一ぱいに漂ふてゐます
夕日はかくれて
途ははるけし
ゆくすえいかにと
おもひわずらふ……
私は何かしらん力強い大きな或ものに抱かれるやうな心をもつて　靜かに靜かに……
何時までも彈いてゐました。

美知子様へのおたよりを毎日少しづゝ……　氣分が快かつたら書くし氣分惡かつたらよ
してあれから幾日になりましたでせう、とりとめなく御ゆるし遊ばせ。

恵まれぬ幸を　【十八の人妻より】

美知子様

桐の葉ずれに秋が來ました。寂しい秋が訪れました。
草むらには、はや夕露の影に、こうろぎがはかなさうにむせび鳴いて。
美しく澄み切つた、秋の空には、待宵草のやうな色をした月が浮んでおります。

森の姫とも唄はれた、
それは昔の夢ぢやもの、
なさけないぞえ、のろはれて、
今ぢや水藻に咲く花よ、

月の光に誘はれて、
金の髪の毛をすき乍ら。

わたしやこうして夜もすがら、
昔こひしと泣きまする。

あの頃好きで好きでたへず、口吟さんだ水藻の花……
今はわたしの身にこのやうな唄がふさわしうなりましたもの。
今宵は赤い酒を求めに、明日は紅い燈の影に戯れて、其日其日の觀樂をむさぼり歩いて
夜更けて歸つて來る不純な良人を待ちながら、眠りもしないでおりますの、夜な夜なたゞ
月の光りに過ぎ去つた樂しいうれしかつた、處女時代が戀しうて泣いておりますわ。

七三に分けた分前髪、オリーブの色の袴、名もない野の花にさへ、泪ぐましい程の情緒
を覺へ、窓の窓から、紅に彩どつた夕の雲にも、限りない憧がれを覺へたあの頃がなつか
しう御座います。

四つ葉のクローバーの影によつて、AさんTさんと美しい未知の世界を描いては、我に
もなく、微笑ましたのね

あの頃・描いた未知の世界は本常に、夢のやうに華やかに・美しう御座ましたのに、實現されて見れば餘りに汚れ果たのに、美しい夢は跡かたもなく・ふみにじられました今は處女の日の美しさも清さも・何も彼も失つて了ひましたもの・若やかな心の自由さへもうばはれて・今はたゞ現實の惱みや苦しみの前に、みにくい生きた屍をさらしてゐるに過ぎませんゝ

病葉の上に、しとしとと、時雨降る夜はこのやうなはかない歌さへも湧きますの、

桃色のきねを透かして見し夢は、

あまりに、若くうるはしかりし、

美知子樣・御笑い下さいましゝ

すべてが虛僞で御座います、悲しいさいなみも、傷りのいましめも、運命と云ふ殼の中に、おとなしく入り乍らも、ともすればもがき出ようと苦しみますわ。

花恥かしい　十八の人妻、まだ片あげもとれぬ、若い夢見る人もありますものを、何に

のろはれて、こうした悲しみを享けます事やら、處女の誇りは消え失せても、胸に若い血潮のもゆる若い女で御座りますものね。

寂しい夜頃は、別れた戀しい人の名を呼んでは、今更返らぬ事ですけど、過去の夢が忘れられません　失意の胸を抱いて　異鄕にましますK さま・田鶴もこうした悲しみに泣いておりますものをね、幼い頃から父も知らぬ、母も知らない、ひとりぼつちの私を、慈くしんで下すつた叔母さまに對して、K さまとの戀をどうしてお願ひ出來ませう。

叔母さまの御命令におとなしく從ふて　現在の良人の許へ嫁しましたけど、日毎に良人の胸から離されて行く悲しさは、どんなで御座いませう、歸るべき、行くべき家もありませんもの

滿たされぬ心を何によつて慰めてゆきませう、愛しやう・愛しやうとあせれば、あせる程、良人の胸から離されてゆきます、

私にのみ惠まれぬ幸を思ふ時、涙ばかり湧き出てごうしやうもございません。

或夜は深山の奥の尼寺に、墨染の衣に一生を送らうかとも思ひます。

人の世は僅か、五十年ですもの、何の爲めに生きるのか分りません、何の光明も見出さずに、苦しみ乍らこの世を終るなら、生きてゐたいとはちつとも思ひません。

『萬有の眞相は一言にして盡す、曰く不可解』

と云つて華嚴の瀧に身を投じて死んだ、藤村操の死を讃美する折もございます、

美知子樣、死は罪惡でせうか。

都の空に相愛の人とホームをお送り遊ばした、葉子樣、お病が重なつて、この秋の初に茅ケ崎で、あへなくおなりなさいましたとか、おやさしいハズ樣に死ぬまでも、看護されて、天國へお歸り遊ばした葉子樣、わたしは葉子樣をお羨ましう思ひます、虛僞で結ばれたかなしい一生涯の長い結婚生活よりも、樂い一年間の結婚生活の方がどのやうに幸福でございませう、永遠にのろはれて、生くるよりか、短くとも、美しう散り度うございます

フリジヤの花を思はする可憐な葉子さま、やさしい瞳のやうなお星さまが寂しい明滅を續けております

夜も大分更けました、夜風が肌に心地よくふれます。

愛人の死を

A様

今しばらくは何も彼もおとがめ下さいますな。

世の中の何も彼も、思ひ捨てた身ではございますけれど　早そことない、初秋の風が吹いて裏の山にひぐらしの啼き入る聲に夕暮がせまつてまゐりますと、只もう意地も力もなく、涙ばかり湧き出て、身の置き所もないやうに、思ひます。

もう和らかな母の腕さへも、何年か夢を守つて呉たなつかしの家も　今の私の寂しい身のかくれ家ではなくなりました。

廣い世界によりごころもないこの身、たゞもう人をも　世も、自分自身さへものろひ度うなります

世の中のあらゆる人々、何を夢見て生きて行くのでございませう。

樂かつた、嬉しかつた、思ひ出や、私の美しい燃ゆるやうな理想や、希望は、皆んなあ

の頃の夢に過ぎませんでしたもの、覺めた今はより以上に、はかなうございます。

十八年の夢は『すべて空虛でございました、けれど、この先、廿年、卅年、わたしの生涯はもう永久に、空虛であると思つておりますわ、希望も、光明もふり捨てた身は何を生命に生きて行くのさへも分りませんもの。

若い人妻、生涯を約した相愛の人も今はなく、つながれた身をもつたわたし、安住の地も見出せぬ　ほんのひとりぼつちになりました、一人で生きて、一人で死ぬ、ごうせ二つの靈ですもの、離れ離れに、滅するのは當然でせうけど　：戀のみに生き得る生命でしたら、この身もとうに葬つておりましたものを、何で生きてなんぞゐませう

『僕は病床にありながら、たへずあなたの幸福のみ祈つてゐる、あなたと僕とのかりそめの約束を守つて、今まで待つて下すつた事を　感謝する、僕は自分が死んだならばあなたにも死を希つた、それは今になつて大變な、罪惡である事を知りました。

たゞ、愛するものゝ幸福を祈つて快よく死に赴く……』

死に面して、やつとこれだけ認めたAの遺書を手にして、時々自殺しやうかと思ひましたけど、死は罪惡だと知りました。尼にならうかとも思ひましたけど……

不治の病を持つたAと、ごうしても私等の結婚をゆるしては呉なかつた母を、無情と思ひました。母を捨てゝ病める人の許へ走つたら……愛する人の病めるのを見殺しにしても、母の言葉に從ふのが子の道なのでせうか。

毎日毎日、病の重るAの父からの手紙を手にして、苦しみ乍らまるで惡夢でも見續けてゐるやうな日が續いて、私もとうとう病床の人となりましたわ。身も心も共に苦しみ悶えてゐるうちに、いつか秋風が、柳の葉づれにさやさやと音づれて……澄み切つた秋の空には、天の河が底知れず流れる頃になりました。其頃、Aは須磨に病を養ふておりましたが、とうごうその秋の末に、寂しい松風を名殘りに、遂にかへらぬ人となりてしまひました

最後までも、この私に一目逢ひたかつたと、言ひ暮したとの事を後になつて聞いたわたし

しの心持は、どんなでございましたでせう。Aと死までも約した私ですもの、何の執着がございませう。それになんぞこうしてみにくい戀の屍をさらしてゐるのでございませう。

身も心も、弱り果たわたしに、後からと、後からと、様々の不幸が掩ひかゝつてまゐりました。父をも亡なつた頼よりない折に、頼みに思つた兄にも先だたれ、打續く不幸に何も彼も人手に渡つて了ひました。

戀しいAの名を心に、操りかへしながら一生をAの死骸と共に暮さうと思つたわたしの望みは見事に裏ぎられて了ひましたもの、この身さへも、人手に買はれねばならない破目に陥りました。

美しい、悼ましい『犧牲』と云ふ名の下に、空虛の身をS家へ送つたのは時雨する頃でした。黄金の犧牲、母を救ひ、家を再興した私は立派な子の道を踏んだのでせうか、それが例へ、虛僞であつても、孝の道なんでせうか。

滿たされぬ心と空虛の身を、末はあの冷たい墓の中に葬り去られるのを、ひたすら待つ

ております　靜かに眠つたAは　わたしのこの淺ましい姿を、どんなに悲しんでおりませう。ごのやうに、冷笑つておりませう。

結婚を强ひられて

よし子樣、今日も冷たい雪になりました。北國の冬は堪えがたう寒うございますわ、先日から御手紙戴きながら失禮しておりました、おゆるし下さいまし。

わたしこの二三日身も細る程　思ひ惱んでおりますの、お察し下さいまし、其度毎に亡きお母樣を偲んで悲しくなりますわ、まだ母を亡なつて新しい涙もかわかぬ間に、見も知らぬ人を第二のお母樣と呼ばねばならなくなりました、日曜毎の墓參に母樣のお好きだつた水仙の花をたむけながら、何時も悲しい思ひを訴へております

少しでも悲しみから逃れやうと近頃はお琴の稽古に通つております。

先日、お琴から歸つて茶の間のお母樣に挨拶して自分のお部屋へ歸ろうとしてましたら『一寸美知さん、お話がありますから』とおづしやるので　こわごわお母樣のお傍へ坐りました、何だか頭から重い石でもおしつけられたやうな感じがしました

美知子さん、あなたももう來年で廿才ですわね　何時までもお家にゐる事も出來ませ

んしね、お父様とも御相談したんですが、お嫁に行く氣はありませんか』とおつしやつたのに何の事かしらんと今までそのやうな事は豫期してもゐなかつたので、體中の血が一時に逆上したやうになりましたわ。女にとつては結婚は生涯の難關ですものね　お父様だつて……餘りなまだ廿才にも充たないのを何にもそんなに急に結婚なんざゝおつしやらないでもいゝものをと、お母様さへいらしたら、こんな事にはならないのを、本當に口惜し涙が跡から跡からにじみ出ました。

『いづれよく考へた上で御返事します』云つて其場は逃れました。茶の間を去つて自分のお部屋の机の前に、母様のおうつしゐ抱きしめて思ふ樣泣きましたわ。

其日からお母様と顏を合はせるのが何より苦痛になりましたわ。結婚のお相手の方と云ふのは今のお母様の兄様の長男なんですの。

Kと云つてね、お家へも度々まゐりますの、でも何だか親しめない人ですわ。わたしどのやうに考へても性質も知らない、愛も湧かない人と生涯を共にする事は考へたゞけでも

おそろしうございます。愛のない結婚は罪惡ですもの、結婚したら、愛は自然に湧く……なんて云ふのは虛僞ですわ　不純ですわ、肉體から生ずる愛、それは何と云ふ汚れた愛でせう。私は純な戀に生き度うございます。

戀が結ばれて生じた愛、それこそ本當の愛でございますわ、無媒にして結ばれた夫婦の愛、夫の妻に對する愛は、それは人類の愛に過ぎませんもの、一度結ばれた不幸な結婚、それは生涯苦しめられます。

お父様だつて少しは私の心を理解して下すつたらと、それのみ悲しう思ひますけど、今は一人として私のこうした境遇を理解して下さる人はありません。私はお母様のお言葉に隨つていやな結婚をするよりも、亡くなつたお母様のお墓へ行き度うございます。

お母様は毎夜のやうに『美知さん、御返事は』はとおつしやいますの、何と御返事申上ませう。決して決して私はKと云ふ人に不足はございませんけれど、どのやうに考へても、そんな不安な結婚は出來ませんもの、今暫くはそうした問題から逃れさして下さいまし

とお願ひするより外はございません。けれど、そうした後のお母様のお心が思はれておそろしうございます。私一人の爲めに、幼い妹までがごのやうに悲しいさいなみを受けるかと思ふと、どうしたらいゝかしらんと苦しみもだへますわ。

よし子様、お察し下さいましKの許へ嫁ぐのは、お家の平和を保つ上には、最善の方法でございますけど、わたしの一身までも犧牲にして虛僞な結婚する事が、子の道なのでせうか、亡くなつた母が戀しうございます、母さへ生きてゐてくれたらと、冷たい墓石を抱いて悲しむばかりですわ。

暑さの折柄

毎日毎日、乾き切つた屋根の都に、強い強い陽の光がヂリヂリと照りつけて妾の樣な暑がりは朝から晩迄濡手拭を肩にかけて半裸體でゐますのよ。

氷を飲む事と、お湯を使ふ事と、夕方の散歩の三つより他は寢ても起きても暑さ故の苦しみ許りですわ。

こんな時に貴女がいらしたお話でもしてゐたら、暑さなんか忘れて了ふんですけど、此頃何うしてゐらつしやるの。

御兩親や、お妹さん達もお達者でせう。

今日もね、家で貴女の所でも矢つ張り暑い暑いで暮していらつしやるんだらうつて皆笑ひましたのよ。

時折はお遊びにいらして下さいまし。

皆々樣へよろしく

若菜に添へて

六甲の麓にこむる霞の色も日に日に春めいて、芦屋の景色も大分長閑になつて參りました。

今日はお母様や妹等と二人して近い野邊に半日を遊び暮し、小川の根芹、岡の土筆など、歌の題にもなり相な趣……

でも流石に小川の水は深山の雪溶けか、手の切れる様な冷たさ、其をこらへて手籠におふれる許り摘んで參りました。

少し許りですが、お母様のお言葉によつて、おすそ分けいたします。

糸子より

若菜の御かへしに

雪のひまより萠え出た若菜、お手づからお摘み取り下さいましたものをと、一入嬉しう存じます、さながら野邊の様も見にる様な心持がいたします。都の甍の中に暮す身の兎角春の行方も知らで打ち過ぎてゐましたが、若菜の色の緑を見て始めて自分の、無風流に驚き入りました。せめて此日曜邊には、お邪魔いたし、お宿の春を樂み度う存じてゐますお母様や皆様に呉々もお禮お傳へ下さいませ。

或女學生の日記

×月×日。

休みの時間にAさんが。

『あゝ私も亦人生終に何とやらと云ひ度くなつちやつたわ、』と感傷的な聲でつぶやく

『なぜ』つてYが聞いたら。

『私にはやつぱし人生なんて不可解よ、私も第の二藤村さんになるのかしらん、でも華嚴はい　のね』なんてAさんは憧景的な瞳で中禪寺湖畔の姿を思ひ浮べていらつしやるやう、

Aさんが學校の歸りに遊んで行つた。

Aさんに借りた『若きエルテルの悲しみ』を緣の涼しい藤椅子によつて讀む

『戀しいロッテよ、私は窓に立つて眺めてゐる　烈しく飛んで行く雲間に永遠の空の星が二つ三つきらめいてゐる。』

これは美しい人妻のロッテに戀したエルテルが最後に送つた手紙だつた、人妻に戀するのは不道德なのか、不自然なのか……

夜にいつて英語の復習をする。

×月×日

卒業て行くのも十餘日の後と迫つたのでクラスメートと名殘の級會を開く、日曜だつたので先生方の御來席も願はず水入らずのお友達ばかり、級長の御挨拶の時も涙でとぎれとぎれになり聞く人も皆涙ぐんでしまつた、『別れ』の歌を三部で合唱して後は話に、過ぎ去つた四年間の思ひ出など語る。

其日の日直の音樂の山田先生がいらしてしみじみ過去の境遇をお話して下すつた。

やさしい音樂の先生の記念にと…先生のお好きなローズ一輪彫刻したリングをお送りする。

『皆樣のお志しは……いつまでも忘れません』とおつしやつてお泣きなすつた、皆も

泣いた。

×月×日

卒業期を前に控へて若い人々は廣い運動場の隅々に……希望にみだるゝ胸を抱いて集さつた。

Tさんは目白行きですつて……羨ましい』とはSさんのお聲。

『アラ、あなたこそお羨ましい、K兄様とホネームーン』

『あなたは』

『わたしオールドミス』なんて他愛もなく打興ずる。

歸れば机の上にはなつかしいゝさんのおとづれ。

"AFTER All Life is Never so miserable as hearing Some To Look"

『結局人生と言ふのは人々が考へてゐる程、夫程樂いものでも、又其れが夫程悲慘なものでもない』

モウパワサンの『ウーマンス、ライフ』の最後の句です、あなたはそれに對してどんなにお考へになりますか』

と書いてあつた、直にも返事書かうと思つたけど、明日にする事にした。

×月×日

S先生の譯讀の御講義の時間、入口のドアーが開かれて見なれぬ紳士が二人……

皆の眼は　齊に入口にそゝがれる。

お一人は若い紳士、苦しさうに笑ひを忍んで伏目になる方……お隣同志笑ふ方など樂しみな譯讀の時間も、うやむやの内に終りベルの音にほつとして皆笑ひ出して了つた。

歸ると今日はわたしの誕生日なのでお母さんが忙しさう、母が心盡しの晩餐のテーブルに向ふと皆が祝詞を述べてくれる。

『お目出度う、姉さんお目出度う』

『有難う……何卒相變らず』云つたら。

『姉さんか氣どつてる』つて弟がまぜつかへす、テーブルのカーネーションが微に顫へてゐる、こうして樂しい夜も更けていつた。

×月×日

今日は日曜、富士見町の千歌さんと朝から鶴見の花月園へ行くお約束だつたので、八時頃お家を出て、九段坂下で電車を下り、靖魂社の鳥居をぬけて行く、いつまで待つてもいらつしやらない、もしやと思つてたら、華美な着物に紅い帶しめていらした。待つてる間に、んな歌が出來た。

ひとりして君をまつ身はなかなかに、辛しと君はしらしめさずや。

おとなしい千いさんを苦しめるにしのびなかつたので默つてた。

品川で電車を下りる、鶴見行はどの電車もごの電車も滿員だつた。遊動圓木などに乘つて無邪氣に遊んだ。

女事務員の日記

×月×日

寢過ごして驚いて起き上つたのは八時、髪結のもそこそこに、今日は電車で出勤。當直部屋へは入る。電話のMさんTさん、もう受話器を耳に、モシモシの連發、當直部屋にはいつも寢坊して遲いSさんがお一人袴つけていらつしやる。

『お早う　云つて手早く黑の事務服に着かへる、嫌な事務服、今度の支配人はこの事務服は宣教師見たいだからよして了へとおつしやつたそうな。

通りがけに一寸電話室のぞいて御機嫌を伺つておく　そうでないと後の祟りが恐ろしい。これだからオールドミスは困る……とは誰やらの惡口　又の名を水雷母艦だつて、母艦がこのオールドミスの電話姫で、水雷は年の行かない私等の事ですつて、嫌なニックネーム、日々の御機嫌伺ひも、これも處世の秘訣だと思つて甘んじてる。

お室のドアーをあける、氣むづかし屋のM主任は未だ御出勤でない、ほつとする、T

さんがパチパチ相變らず算盤やつていらつしやる。出勤簿の印押に行かうと思つたら、監督の御老體の御目が光つてゐる。小言聞くのが面倒と思つたので、明日一所におす事にする。

九時過ぎ御主任の御出勤、何だか室の中が緊張する。今まで騒々しい室の中はぴたりと靜まつて神妙にタイプ打つ人は打つし、算盤はパチパチ、暫らくは戰場の樣な忙がしさ

今日は御主任の御機嫌は如何かと誰も彼もが、鼻の下ばかり伺つてゐる。あへて女ばかりではない、堂々たる男子に於てさへこんな事だもの、意氣地のない事限りない。

主任の事を寒暖計、雨やら風やら、晴天やら、毎日毎日御天氣かかわる、メートルが上つた日は必ず何事か突發する　やがて御書が來る、皆裏の食堂へ、出拂つた後の室は靜かでいゝ、鬼のゐない間の洗濯と、御手紙を書くやら、日記をつけるやら、大車輪で目のまわるやうな忙しさ、給料貰つてゐながら、公用と私用と一所にしては困るとおつしやるかも知れないけど、そんな事は一向かまわない、チリンチリンと卓上電話のベルか忙がしく

鳴る。

『何誰だ、』つて云へば輪出掛のYさんから、『今誰もゐないから遊びにいらつしやいつてのお電話、こんな私用にまで電話を使用しては困ると、いつも後からオールドミスからお目玉、あゝにくらしい、もう皆が食堂から歸つていらつしやる　裏の廣場でキャッチボールをやる人、表の海岸通りを散歩する人、御室へ歸つて悪戯云ふ人、書の三十分は本當に面白い、三時頃主任の御出掛　嬉しい痛快と呼ぶ、階段の足音を見すましたら、皆各自の仕事をほつて無駄話をやる、私等を相手に嫌な事云ふ人や、歌を歌ふ人、外へ出る人あつて、本當に主任のゐない間は仕事も何もしない、このやうな事がお耳にはいつたらそれこそ直ぐにも、首になる所だけど、お互にそうした秘密は掛りで申合て洩れない、お隣の庶務掛から、カステラがあるからいらつしやいとお使が來る、御馳走に行つて三十分も話しこむ、後の高臺に女學生が二三人こちらを向いてゐる、

目禰好男子のAさん『あそこにシャンがゐる、僕ばかり見てゐる、早く望遠鏡を』とお

つしやる、そうして一生懸命に見るので、女學生は姿を消して了つて後には若葉がみゆるばかり、今日は支配人は午後三時から御歸り、書類は全部自宅へ送り屆ける

そうこうしてる内に六時が打つ、早い人は歸へりかける人もある。M主任はまだ中々お腰が動きそうにもない、これだからとしよりは嫌ひだもの歸つても別に運動するでもなし、用事がないんだから何時まで立つても御歸りない、まア夏だから日が長いから、樣なもの、冬は今頃は眞暗だもの、それに電車道まで遠い事ある　遲くなつた冬の夜なんか、本當にひとりで歸るのは恐ろしいやうにある、もしか不良少年にでも尾行されたらと思召すならば、少し考へて欲しい、徒らに若い青年と口を言くとあやしいと言つたり、戀は不純　と云ふ僞道德家よ、もつと近い所から注意して下さいと云ひ度くなる、

まして若い娘を、定刻に歸さないのは、何處の會社でも同じだろうけど、非常に間違つてると思ふ、七時過ぎてもまだ書類が來ない、其間なす事もなく机に對合つてのは隨分苦しい。支配人等は自宅で煙草でもふかし乍らやつてゐるのだらっけど、私等に取つては時

間を空費すると云ふことは何より苦痛、其間に歸つて御洗濯やら　裁縫やら、山のやうにある、自分みたいに何から何まで一切、人手をかかりないと云ふ主義の者は中々忙はしい、七時頃になつてやつと書類が返つて來る、發送するものは發送して、やつと逃れたのが、八時、これぢや勞働者よりひどい、八時間制とか　九時間制とかそんな事は形式ばかりで何にもならない、事務服着かへて一人で歸りかける、宿直室も電氣が消してあるので眞暗　近頃は夜勤の人もいないので靜かにある、掃除をする小使と　宿直の人が一生懸命、コードと首つ引き……これだからサラリーマンは本當に辛いと思ひ度くなる　外に出れば、海岸通りはやはり涼しい海風が頰をなでゝいゝ氣持になる　金破銀波の眺めも又なんともいへない、三々五々散歩に出かける人の白い浴衣が目につく　何だか無暗に氣が立つ、家に歸ると　歸りが遲いとさんざんお小言、これだから世の中が嫌になる、誰も彼もが解らず屋ばかりだから……

×月×日

除中四十分の道を今日は徒歩で行く、道々夜勤の歸りだろう　電話姫の娘子軍の一隊と出會ふ、何が嫌だ云ふけれど　毎朝出勤に、この一隊と出會ふの位、嫌なものはないどうしてあゝまで下品なんだらういやにきどつて、長い袴つけて　お白粉をこてぬりに、一々自分等と同じ年位の女でも見つけたら最後、頭の上から足の先までじろじろ目まわす　これほど不愉快な事はない、もう一つは人の後姿をふりかへる、これ位下品な者はない、ごんな上品な顔してゐてもこんな事された日には品性も人格もあつたものぢやない。

例の娘子軍に少から御機嫌をそこなつて、海岸通に出るときが晴々する。

もうこゝから丁度異郷にでも行つた樣な感じがする、海はいつ見てもいゝ、胸の中にわだかまつてゐる　小さい事なんか皆忘れて了つて何とも云へない力強い氣かして……自分自身がこの大自然の前には本當に　みすぼらしいやうに見える。

今日は馬鹿に早い、小使が私書函から手紙を持つて來る、それこそこの手紙の中に私等

仲間の御手紙見つけたら最後　大變、やれラブレター、やれ何つて：　…まさか不具者ぢやあるまいし、戀もあろうし、ローマンスもあり得やう　何も手紙が來たからつて、惡い事なんぞありやしない　女事務員……戀すべからずと云ふ法則もないし、戀は不自然だない、本能だもの、會社の誰やら主任や　支配人みたに　よろしからざる巷に入りびたつて肉の快樂にふけるのとは　雪と墨の違である。

洗面所に行つて手など洗つてゐると、例のオールドミスの一隊が來る　朝の事務室は氣持かいゝ、まだ一人も見えない、今の中にと思つて三階の新聞室に入る、いつも早い出納のMさんがいらつして熱心に新聞讀んでいらつしやる　この方を稱して、妻ノロジー　：本當にふさわしいニックネームと思ふ、御自分でもその尊稱に甘んじてゐらつしやる所が可愛いゝ、もう二人のパパさん。

一寸目を通して事務室へ歸る、階段で女にのみ特に御やさしい計算掛のAさんに出遇ふ。×××學校御在學中に或女學生との間にベビーさんを設けた程のローマンスの持主、だけ

とちつともビアーな人ぢやない　だから美しいローマンスが醜いものになつて了ふ、相變らずにやにや笑ていらつしやる。

近頃はこの女學生だつた人と家庭を作つていらつしやるとか、永久に幸あるやうに祈らずにはゐられない。部屋へ歸ると電話のベルがはげしく鳴つてる、何事かと思つて受話器を耳にすれば、お隣の庶務掛から。

『今日はシドニーの御客さんが二人程見える』から　M主任がいらしたら、左樣云つておいて下さい』つて　承知しました、と御返事して窓から港の方を見ると本當に郵船の大きな船が入港してゐる。

Bさんと二人　どんなお客さんでせう、きつと奥樣も一所よ……なんでまだきもしない人を、勝手に想像してゐる　いらつしたらいけないと應接間のカーテンしぼつておく、

やがてM主任の御出勤、御早う御座いますを云つて　先刻のお客樣の事を申し上げて置く、何時だろうとM主任は一寸腕時計を御覽になつてる所に、庶務掛のY主任が。

『ランチがありますから　御一所にまゐりませう』

云つて誘ひにいらつしやる　ではと、M主任もランチで船まで出迎へ。

海外の御客樣が來ると誰も彼もが御急がしい　小使は荷物運びに、車夫は旅館へ御荷物を屆ける、運轉手は自動車の用意して待たなければならない。

三十分もしたら御客樣がいらつしやる

皆應接間に餘り美しからぬ奥樣に四つばかりの御子樣つれて、思ひなしか奥樣の御顏の色が黑い、海外からいらつした人は大底そうだけど、女優髷に蟬の羽根……近頃は田吾作の娘でも女優髷を結時節だから、左程物珍らしくもない、こゝらの田舍物に、目白やお茶の水の、すつきりした女學生姿を見しやり度い、Aさんの東京へ歸り度いとおつしやるのも無理ないと思ふ。

お晝は御客樣と春若屋へ晝食に行くから電話して置いて呉れ　とのM主任の御命令　早速卓上電話で電話室へ通ずる、Aさんと又今日はゆつくり遊べる……痛快とおつしやる

この暑いのに一日机にかじりついてゐた日には、神經衰弱にかゝて了ふ……なんてAさんこぼしていらつしやる　だからM主任の遊歩時間は我々の靜養時間ですよ……と申したら皆大喜び……早速自働車で御出掛け、何處へ行くもこゝらの田舍では珍らしいと見えて自働車ばかり、東京あたりで、何々大臣などが電車の吊革にさがるのを一寸見習つては如何ですと云ひ度くなる、少し玉歩を運ばせ給ひて四圍の情況にお通じなる事を御すゝめしたい。

歩いたら五六歩の所でも中々玉歩を運ばせ給はない。

御晝の食事が濟んでから、散歩に出掛ける　活水女學校の坂を登つて山手の方へ行く、久し振にのびのびして嬉しいたまにはこした青葉の影に新しい空氣でも吸わなくちやたまらない、三時近くになつても御歸りない、

Aさんの發言で、『アミダくじ』が初まる、今日は運惡く最高に當る、こんな時にM主任がお歸りになつたら、本當にごうしやうないのに　眞日面な　氣むつかしいあの顏を見

ると、『御馳走は如何です』とはどうしていへない。

夕方近くに御歸りになる、それから又御仕事、今日はなるべ早く歸して下さい……と祈らずにはゐられない

今夜は例の御客樣と宴會見たやうなものがあるので早く御仕事きり上げて、御歸りになる、御歸りを見送つてほつとする　手早く整理して歸り仕度……今日の當直はSさん、面白い方、是非遊んでいらつしやい、僕が歌を致しへてやるからと、おつしやる、今日こそは早く歸らなければ又叱られかと思つて、御斷りして歸る、歸ると机の上に都の千いさんからの御手紙、嬉しさ限りない。

×月×日

花賣の多い朝の町を一人行く、除中kさん所のAさんに御逢ひする、『明日僕は歸ります』とおつしやる、もう學校は濟む頃しらん、御羨ましい、學生の方が、學生で混み合ふ朝の町が靜かになるのぼゝけど、何だか誰も通りない町を行くのは變なもの……除中で花買ひ求めて行く、丁度電車の中で御仲間のSさんと出會ふ。

電車を折りてから御一所に會社の裏門をくゞる、今日は電話のオールドミスは風邪で御休みとの事……今日一日はうるさい口から逃れたAさんと顔見合はして、ニッコリ……

……今日はまあ、どうした事か支配人の御出勤の早い事　……明日はきつと雨になるだろう……とひとりでおかしくなつた、何事かあろうとは思つたけどやはりそうだつた、深田の別莊へ御越になるとか、十日ばかり、それに會社の女の誰かとやつて貰ひたいとの事、御鉢は私に廻つてくる、嫌な事……思つただけでも、何も私なんか會社の使用人だから個人の家になんぞ使はれる事はない……と云つ度くなる、私は絶體に行きません……

云つてやつたら、無理にもとは云わないけどとおつしやる。御友達のAさんBさんは二三ケ月前から支配人の自宅にお召しかゝへ……何の名義か知らないけどそれ東京見物だ、温泉だと御同伴だとか。

誰やらのうはさにAさんは支配人の『御かこいもの』とはまんざう負惜しみばかりの蔭口でもなささう　これは奥樣から頂戴したとか、何とかおつしやつてリングヤ御召物や……御了ひにはAさん　Bさんか御氣の毒になつた、富によつて何物をも政服しをければ止まない、不道德な人々のい　犧牲になつて……そうした無節操な人達を心から憐まずにはゐられない、Aさんが計算のお手傳してくれとおつしやたので、一時間餘り計算にかゝつた　お晝の時間にSさんに電話がかゝる。

それは例の美妓から……

『今日是非いらつしやい、奥樣には内密でとのお電話それは電話室からお聞きしてくるゝ、どのやうな秘密もこのオールドミスのお耳に入らない事はない、だから皆さんひくぴく

もの・下にもおかないお機嫌伺ひふり……弱味を貰つた人はこれだからいけない、

こうした美妓との秘密は數限りない、御存じのないのは家にさします淑德な奥樣ばかり、お氣の毒な……男子に言はすると、遊びに行く位の元氣がなければ出世はしない……

：つて女には良人の出世や……成功大した問題ぢやない、愛に充ちた、より充實した家庭生活が營めたらそれで別に不服はない、これより幸福な事はないと思ふ、如何に金があり餘つたつて良人が不品行だつたら仕樣がない……夕方になると奥樣へはお電話で、

今日はお客樣と御一所に○○へ御飯を食べに行くから遲くなるつて　にも交際　二にも交際と……奥樣は良人と言へば神樣の如く信じていらつしやる、兎角會社員の奥さんは平凡な婦人が多いから……左樣……然りで、宅は交際が廣くて毎日お家で御飯なんか食べませんよ……とさも自分の良人が高位高官の如く心得て、近所隣人の御自慢だとか……社で一等の不品行なYさんの奥さんなんか、

『宅は遊ばないだけが何より宜しく御座います』つて……誰やらにお洩らしになつたと

か　世故にたけない奥樣はこれだから困る、だから、私等女事務員はそれだけ異性の裏面を知りつくしてるだけ結婚難が多い……

世の中にはそうした不純な人ばかりはいないだらうけど……男子のみを負めるのは間違つてる、やはり家にある奥樣の手腕にもよる事は免れない。出張する時まで、御愛妾をお供にしていらつしやる事もあるもの、それは會社には秘密だけど、惡事千里を走るで、私達の耳にも入る、だけど御主任階級は何事らなくて濟むけど、まだ獨身の若い人がその樣な醜態でも演じたら早速　首まではならなくつても、遠島へ島流し、朝鮮あたりへ轉勤となる、隨分不合理な話だと思ふ。若い血の燃ゆる獨身の人が鬱を晴らしに行くのが、不道德で　妻子もある支配人階級の人のはそれが自然とは何處までも不合理だと思ふ、昨日お約束してたSさんからMさんTさん御一所に枯薄の歌を敎へて戴く。

己は河原の枯薄、同じお前も枯薄、

どうせ二人は此の世では、花の咲かない枯薄。

悲しい節の歌だつた。歸るとお洗濯……二三日怠けてゐたら山の樣・年老た母の手を貸るのは氣の毒と思ふので、夜遲くまで、涼しい井戸ばたで、ジャブジャブ……盥の中に美しい月が落ちて……　ゐも云へない詩的な氣分になる

こうした誌的な事は私一人しか味はう事は出來ないと。自分勝手に慰めて置く。

或主婦の日記

×月×日

午後從妹のT子さんが來る、丸々と肉づいたばらの樣な頬、學校の事なご色々話して行く。この頃の女學生は本當に自由だと羨ましい、生々した、新しい進んだ教育を受ける現代の學生は本當に幸福だと思ふ。

今一度學生に立ちかへり度いと思つた。もう十年も後に生れたらよかつたのに、私等の學生時代はすべて女大學式に鍛錬られた。

×月×日

田舍の從妹が結婚すると云ふ通知を受けたので何か祝ひの品でもと、A夫人をお誘ひして大丸へ行く、丁度嫁入衣裳の陳列會開催中であつた。

何千圓の帶、何千圓の裲襠なご幾通りもあつた、尊い夫の勞力か父は父の勞力によつてこうした高價のものを購ひ得る人は餘りにエゴイストだと思ふ。ごたごたこみ入りただけ

で別に美感も起らない・只美しいと云ふ外に一種の反感やら憂鬱やらの情が添ふ事を免れない、實用向にと・銘仙一反買ひ求めて歸る。明日は田舍へ送らねばならない。

×月×日

靜まつた朝座敷で水仙を活ける・微かな香りが室に充ち充ちる。午後Aさんがお越しになつた晴々しいお話を伺つて昨日今日の淋しい時雨切を心も生氣づけられたやうに感じられる、夕方主人の同僚の夫人方が二三人見わてT音樂堂にB嬢の獨唱があるとか、聽きたい心は山々だつたが まだ良人も會社から歸らないので體よくお斷りした。

×月×日

しばらく旅行した爲めか縫物が多くさん出來たので朝から居間に籠つて針に親しむ、障子に明るく日の影がさすかと思ふとバラバラと時雨する。

夕方近くお友達のTさんが訪ねられた 別に稚なじみではないけれど お互によく了解し合ふ事が出來る。

私の前には何事もさらけ出してもたれかゝつて來る所が可憐でうれしい・十年一日のやうに、何のわだかまりもなく變らぬ友情を續け得る友を持つた私は幸福だと感謝してゐる。

×月×日

六時過ぎ良人が歸る、同じ掛のA氏が紐育支店轉勤になつて今日社報に出たとか話していらつしやる、奥樣はどうなさるのと聞いたら勿論單獨で行くさ・妻なんか連れてつた日には足手まとひで仕樣がないて……

まだ御結婚後二ケ月程にしかならないのに・

『それは餘りお可愛相ですよ!』と申し上げたら『そんな小さい事にとらわれてゐる時代ぢやないよ現代はすべて社會的にやらなければ 社會の方が近いよ』なんておつしやる、異鄕の空に何年かを過して歸つていらつしやる脊の君を一人してお待なさるお心はどんなにお淋しいだろうといとしい奥樣の上に思をはせる・わたしはこんなに思つた。

男子には社會的名譽と云ふものがそれ程必要なのかも知れないけれど、私等は名譽よりももつと人生に尊く意義あるやうに生き度いと思ふ、男子の人生に對する理想は成功なのかも知れないけど、女の榮冠は尊い愛だと思ふ

若妻日記

異郷の官舍にて

×月×日

起きると直に暖房焚きに取りかゝる、

今お起きになつたばかりの良人が庭の方から

『まだ付かないのか』とおつしやる。

やつとパチパチ石炭がもえだしたのでうれかつた・顔を湯殿の傍の鏡にうつして見たら鼻の先に煤が一ぱい・これだから冬の暖房焚きはいやになる

其中、勢いよく燃えうつて部屋の中が急に温かになる・

良人の出勤を送り出しやつと自分のお部屋に落つく、お國へ送る砂糖の小包やお手紙やら書きあげたらお晝になる、

良人への辯當にいつも來る支那人の子供に渡してからお晝を濟ます・、今日は支那人の八百屋も御用聞きも廻つて來ない、

お晝過ぎから夕食の物を買調へにバスケットもつて市場へ出掛ける。

もう市場には青菜の美しいのが出てゐる、

百匁二十錢・内地のやうにお肉か高ければ野菜の方が大變經濟だけど、こゝでは日匁五十錢だからお野菜なんか反つて不經濟のやうである、なつかしい内地の麹漬の大根や鹽鮭が日につく、日本人の肉屋によつて、ぎようと豚を五十匁づつ買つて、可愛い支那林檎を野菜籠に入れて歸る、

今日はお湯を立てなかつたので三時頃からお湯に行く・五號の奥樣にお目にかゝる・分前髪の方、いつも乍ら美しい、お美しい事限りない、温かい湯の中から外へ出ると・陣の風がスウと頬を切るやうにある・ポプラの落葉が寒さうに水はきに溜つてゐる歸ると郵便受になつかしいAさんからお手紙が來てゐるうれしい事、五時頃から夕食の仕度かゝる馬鈴薯とにんしんを細に刻んでブタでシチユーを作る　にくを細にしてオムレツトにする六時頃良人が寒さうに　顔を赤くしながら歸つていらつしやる、温かくして食事をさし上げたら、おいしいおいしいと云つて召し上るうれしい。

夜に入つてから良人に英語の復習をみて戴き・其後で江戸小彌太の復活を讀む

餘りにつゝづれなので、林檎むいてさし上げる。机の上の時計が十時さしたので家計簿をつけて休んだ。

若妻の旅日記

湖南の三日

八月六日

暑い午後の陽ざかりを清を相手に裏の木蔭で張物する、表の格子戸がチリンチリンと鳴つて、開いたので今頃お客様なのかしらんとたすきはづして急いで玄關に立てば、良人のお歸り。

『どうなすつたの』

云つてもお返事もなく笑つていらつしやる。

『さあ、妙さん、大いによろこぶべしだ』

何でございますの』

私には何の事だかさつぱり分らない。

『早く仕度をしなさい、二度目の新婚旅行だ、今日から三日程鎌倉方面へでも行かう』

この一言にまア、うれしいとお張物も何に清に任してお仕度にかゝる　さあどんな着物に

とおつしやる　御自分は洋服がどうの、ネクタイがどうのとおつしやるくせに……

先日ボーナスの御祝に三越で買つて戴いた明石縮に博多の一重帶といふ輕裝にする。

東京驛を六時五分の國府津行きに乘つて下車したのはもう夕暮、右手に仰ぐ富士は紅の夕雲を裾野の紫にかけてゐた。

今宵は江の島泊りと決まつて宿の案内者を先登に島へ渡る　長橋にかゝつた頃はもう薄赤い三ケ月がのぞいて、片瀨川の畔の汀の蘆がざわざわと夕風にさわぐ。

相模灘の濤聲も物なつかしく、かすかに響く船歌もうれしい。

良人が電話しておいたので、宿では靜かな室をあかしておいて呉れる、浴衣に着かへて一風呂あびる　湯からあがつておばしま近くたゝずめば、靜かな浪の音にまじつて粹な音じめ　旅の疲れも忘れはて、聞きほれた。

八月七日

浪の音に目覺むれば空は美しいルリ色に晴れてゐる。朝湯に浴つて膳に向へばうれしい

旅の氣分がそゝる。

今日は濱傳ひに鎌倉へ行かうとおつしやる。晝近い頃に宿の者に送られて旅館を出る。美しい砂地をふみしめて良人と二人草履のきびす重たく、ポクポクと鎌倉指して行く。思ひ出せば良人と許婚時代の折、兄と三人由比ケ濱邊をそゞろ歩いた折もあつた。今二人がこうして訪ふて行く鎌倉は私等に取つては本當に思ひ出なつかしい地。

片瀬驛から三十分餘り電車は美しい濱邊を逢ふて走る　やがて松風涼しい詩境へ我々を吐出した。

松風館までは僅に五丁、若葉の一室に二日目の旅裝を解いた。

お晝の膳がひけてから横須賀まで行つて來やうとおつしやるので御供する。

夕暮近く宿に歸れば隣室では床も拔けるやうな馬鹿騒、夕食もそこそこに美しい月に濱邊へ憧れ出る

はるかに黑く横たわつた江の島、キラキラと水にうつる灯の影、遠く豆相の山々は薄々

として夢のやう、吹きなぶらる、袂を風にまかして冷たい砂地に腰をおろす、良人は少し離れて兩手をくんで立つていらつしやる。

涼しい月、月から生れたやうな風、二人の影のみ黑く長く、ごうごうと渚にくだくる波の音　涯もない大海原、無限の神秘をたゝへた沖闇、何だか魔物にでも誘はれそうで泣き度くなつて來た

『かへりませう』と私は良人をうながして、ヒタヒタと足もと近く金波のよする波打ちぎわを傳ふてかへつた。

仰げば空には無數の星がまたゝいてゐる。あすは葉山に殘りの一日を……

或人々の日記

×月×日

明けるより暮るゝまで雨の音ばかりで本當に遣瀬ない・春雨も風情があつていいつて云ふけど、こうした淋しい思して・悲しい嫌いな事秘めた身には何よりわびしい

魂の底までも喰ひ入るやうな雨　こんな日は家にゐて好きな本でも讀んだらと余計な事までも考へる　そうして暗い氣になる・會社の薄暗い當直室にたつた一人窓ごしに細い細い雨の落ちるのを眺めてゐると故もなく悲しくなつて來る　外には何にも見えない　隣の支那人の日い倉庫の壁ばかり冷たく光つて見える・それにも飽いた　遣瀬ない疲れた瞳のおき所がない・ふと傍の姿見に自分の顏のうつした時に何一つ粧はない薄汚れた顏に・何とも云へな　淋しい思がして冷たい頬に涙が落ちた　萩香さんぢやないが『誰が爲に粧ふ姿ぞ　朝な夕な青葉の窓に・私は血の氣の失せたのが悲しい』

年老ひた兩親の爲に、ペンを持ち乍ら・こうして終つて了ふのかしらんと思へば人生と云ふものはかないもの・何を樂しみに・何の望に生きてゐるのかしらん

何時になつても雨は止みそうにもない・Aに出した手紙ば屆いたかしらん　今日一日はこうして暮し行のだらう、

今日ば日曜だつたので二時半頃から歸りかける……やつぱし降つてる　何時まで降るのかしらん　何だか寒くなつた樣だ、

×月×日

濱の病院に淋しい日を送るKさんから御手紙戴く、蟲ばまれて行く胸を抱いて思ひ出に泣いてゐらつしやるだらう、

同じ望に生きだ日もあつたつのに、

『散る時はどうぞ御一所に』とよく誓つたのに、人は生れた時から別々の運命をしよはされて來たのだらう、

誰もが永久にひとりぼつち・淋しくとも・悲しくとも　ザワザワと裏山の竹の葉づれが騒々しい。

夕方叔母と明るい町をそゞろ歩く、

葭簀張りの植木屋にはバンジーの鉢がいくつもならんである・可愛鉢にあふれるやうに咲いたバンジーの黄や紫の花が好きで好きでたまらなかつた

あの花を机においたらどんなに美しいだらうと考へた、美しい娘さんが母親と一緒に來て鉢に植へた薄色の花を持て行つた、私にはこんな花を買つた呉れるに本當の母親がない、悲しく斷めて木の葉のゆれる植木市の中をすたすた歩いて行つた。

×月×日

近頃には珍らしいお天氣でうれしい、

藪のやうなわたしの庭にもダリアの紅いと桃色の鳳仙花が毎朝澤山咲く、朝早くお友達の方が二三人見えて兄のアトリエの方で遊んでいらしたが御一所にT公園に寫生に御出掛けになつた、靜かになつたので取り散らしたアトリエを片づけてから、ベランダに籐椅子を持出してAさんに貸て戴いた『何處』行く』(クォーヴヂス)を讀む、

讀んで行く私は一行は二行とつり込まれる程の興味を感じた。

美の都……歡樂の限りをつくしたローマもネロの一詩の材料としてやき盡されて了つた。

のろはしいネ　の狂藝、この物語で一番心に深く感じたのはリジア姫とキリスト教徒である、ローマの盛衰はこのクォーヴヂス中によく描かれてあると思ふ。

×月×日

久し振に好きな唐人髷に結ばうと思つて髪結の所に行つたけど　大勢たつたので・除け

から自稱音樂家のすみちやん所へ遊びに行く、円の外まで獨唱が聞える。

雨は降る降る城が島磯に……

すみ子さんの御宝で思ひ切り大きな聲で讃美歌を唄つたりした・しみじみ若い日にめぐり合つた幸福を感んぜにはゐられなかつた。

歸ると机の上に指折り數へて待ちあぐんだ寫眞がのつてゐる、云ひ知れぬ不安と喜びとに小さい胸をおごらせて　そうつとカバーをあけた、思つたよりもよく寫つてたので何だか今日一日快よかつた。

X月×日

朝の涼しいお部屋で小說讀んでたら、

『秀樹兄さんが來て　よと　妹の夏子の大きな聲が廊下にひゞく、手早く鏡に向つて顏を直して少說をしまつて英語の本を讀み出した。

『おや、御勉强、めづらしいなあ』と秀樹さんは御部屋には入るなり……

きつとお天氣がかわる、今日は切角晴れたのに……と晴れた空を見上げていらつしやる、今日は日曜でもあるし、勉强した御褒美に夏ちやんと一人オペラ座に連れていて上げるから夕方までに磨きあげておおき……なんておつしやる、夏ちやんと大よろこび……

ステージで踊り狂ふ女優の足が大きくて、ねりま大根のやうだつて秀樹兄さんが笑はせるおかしくておかしくて仕樣がなかつた。

×月×日

Aからは其後まるで音信不通になつてゐる、どうしたかしらん、先日のわたしの手紙に近頃は大變幸福に暮してゐる云々の事を書いた、女同志はいくら愛し合つてゐても、相手の非常に自分より以上に優れたものに接した瞬間、グット野性が出るものである。競爭心とか嫉妬とかいふ類のものである、

それはもつとリフワインせねばいけないと思ふ、○○會、▲▲會と近頃陸續として組織される婦人會が創立後幾何もなくして瓦解するのはやはりこうした根强い野性がよく働いて淘汰さりないのによるのであらう、

×月×日

今日　私は廿回目の誕生日を迎へた、人生五十年と見れば五分の二だけ過ごして來たのである。

その間、自分は無駄な月日を送つて來た事に今更乍ら驚いた、私はやつとこの年になつて自分の中に躍動してゐる生命を知つた、それは私にだけ與へられた力である　個性である私にとつては貴い寶玉である、この生命が今後の私の生活の原泉となるのでなければ僞だ人の迷惑を考へたり、世間の評判を恐れたり、形式に捕はれたりして、此の生命の叫びを無視する事は最も大きい罪惡であるもつと素手で世の中に出る事だ、私は廿年の今日にやつと得たこの信條を兩脚としてより人間らしい、より正しい生活に精進しなければならない、

×月×日

『大分熱が下つたやうだ』と心持ち汗ばんだ額に母の手の觸れるのを感じて目覺めた、眼をあいたら枕元のカップにさゝれた紫色のサイネリヤの花が美しい、母が食事を運んで來る、早く快くならなくてはと思ふと胸の底から熱い涙がつき上げて來た、

×月×日

初霜のおりた冷たい朝だつた、

『紅雀がとうとう死んで了つたよ』と母がとんきよう聲を出す、ハッと息づまるやうな思がして目が覺めた餘り寒がつたものだから、可愛さうに……今朝もまだ引かない熱の温味が悲しく手にふれた、

小鳥の死と云ふ事が今朝は妙に頭は響いて暗い心になつた。

×月×日

今日は何だか頭が變になつて氣狂ひにでもなりそうである、うす暗い茶の間の方を透かして見ると青白い顔をして母がまるで幽靈のやう……

あゝ、いやなお天氣、縫物を放り出して窓の所へ行つてポタポタ落ちる雨の音に見入つた、段々風まで加はつて門一歩出られない。

本でも讀まうと思つてもまだ電燈だつかない、

ピアノに向つて、自棄にキーをたたく、

ナイルの岸に咲く百合の……花より赤きエジプトの……風と雨がコーラスしてくれる。」

×月×日

パット朝顔の花でも開いたやうに夜の灯がつく

冷へびえした朝風が窓から吹いて來る。

Aさんに K さんを誘つて植物園へ出掛ける。

電車を降りると俄雨に遇つたので道を駈け出す

『アヽ御覽なさいヽほこりがダンスしておすわ』Aさんが藝術家らしい事をおつしやる。

『俄雨でね、眠つてた、ほこりが目覺めてダンスしてるのよ　とKさんが註釋を加へるので大笑ひであつた。

×月×日

又粉のやうな雪がサラサラ落ちて來る。鉛色をした空から白い白い粉一つめたい粉が一こうした辛い冬の後には花の咲き揃ふ春が來る苦しんで始めて樂しみを味はふ事が出來る

けれど　私自身はどうなるのだらうか、いつまでもこうして叔父の家にゐる事も出來ないし、母へ出した手紙の返事はまだ來ない、再婚した母の所へ行くのは尚嫌だし、あの旅費が送つて來たらやはり東京へ行つて、そうして何處かへ勤めに出やう　自分自身の勞苦によつて生きて行く事は尊い事だと思つた、夕方母へ二度目の手紙を出す　上京云々、に付き旅費御送附下さい……と書いた、後で再婚の母を苦しめた事を悔ひたけれどこの場合外に道はない、叔父のかすかな寢息がとがつた神經にピリッと響く。

×月×日

後で讀んで樂しみにする可き日記が此頃では薄黑い色で一日一日と染まつて行く、何とふ悲しい事だらう　、今日も勉強する氣にはなれない、持つて生れた神經過敏はどうしても直らない、この神經を殺すと云ふ事は私にとつては、死に等しい、知的にも情的にも鋭い此性格は私に取りては唯だ一の生命である、一寸した事でも非常に嬉しく、又有難く感じ、一寸した事でも本當に不愉快に感ずる。私は元々恩讐の念が人一倍強い、ごんな小

さい事でも自分に對する厚意と親意を忘れた事はない、この事は自分自身でいゝ事とも惡い事とも思はれぬ。

自然に性格の一部を爲してゐるのだから、それ位になければ、自分等のやうな境遇のものには到底此激動の中を行く事は出來ないと思ふ。

×月×日

婦人世界の『現代生活性との惱み』にこんな事があつた。

『女子は男子に較べて一般に消極的であるから男子の仕向ける性的行爲に對して　それに理解のない所から徒らに驚きや、怖れや不快などを經驗しながら、偏狹な道德觀に囚はれそこに不自然な諦めを求めてゐる有樣である。

日本の在來の婦人はその通りである、精神的にはお互に理解も滿足もあり乍ら、肉體的には恐怖や、驚きや、不審や憎しみを味はふと云ふ事は本當に　夫婦の生活を虛僞にならしめると思ふ。どうしたら積極的に理解出來るかと云ふに、それが問題だと思ふ、少女時代

に適當の指導者がゐて理解させる事が一等安全と思ふ。

×月×日

天氣が大變好くなつて來て何處の山もほんやり霞すんで何とも言へない、最う春が來たやうな氣がする　青い空には少し許りの白雲が悠々と流れて行く、柔い日光がやさしく顏や手足をなでる、ひやつこい空氣が肌觸りよく着物をかすめる　細い石段の小路、山腹の小路、あゝ、春、春、何んとなく遣瀨ない寂しい感がする、家にある繼母のするごい眼、暫しでも逃れた嬉しさはやがて暗い心を抱いて山を下らねばならなかつた。」

×月×日

紫の御包かゝへてお針に通ふ、水車場の美知子さんお誘ひして行く、水の流れも何にかなしに温んでもう直に春が來る事を思はせる、春、春、春になつたらこうして針仕事にも通へないし、つまらない、結婚なんて本當に嫌な事、まして養子が來るんだもの　小糠三合持つても養子には行くなと言ふやうに、自分の理想なんぞとはまるでかけ離れた人を

、お母様に向つて、お斷りしやう思ひ乍ら、とうとうそれも出來ない内に、決まつて了つたもの、色々な事考へて間にお針屋の門口へ來た、モミの裏地を縫ひかける皆さんが御婚禮の着物でせう、お目出度うを浴びせかける、何にがお目出度いのだろうか

人の心も知らないで……うつむいて糸をしごき乍ら熱い涙が布の上にポトリと落ちた。

大正十二年六月五日印刷
大正十二年六月十日發行

處女の文から
定價金壹圓貳拾錢

著者　大阪市東區南農人町二丁目廿四番地　坂井りつ子
發行者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　前田千代藏
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎
印刷所　井下書籍印刷所

發行所　大阪市東區松屋町和泉町北入
大文館書店
振替口座大阪四二九五四番

不許複製

290
332

終